

# フランスの革命運動 一八一五—七一(三)

ジョン・プラムナッツ  
高村 忠 成(訳)

## 第三章 七月王政

### 第一節 共和派と自由派

#### (1) 七月革命における両派の動向

シャルルー○世と亡命していた彼の友人たちに同情を示す人はほとんどいなかった。彼らは、一八一四年にフランスに戻ってきた。だが、当時、彼らは、人々から一世紀も前の、遠い過去からよみがえってきた、自分たちとは無縁の侵入者ではないかと思われた。人間のような形をしているが、何か事を起こしそうな幽霊ではないかとも疑われた。ただし、このようにいったからといって、彼らが特別に注目を浴びたというわけではない。ただ、彼らがフランスに戻ってきたことによって、フランスが、再び大革命以前の状態と同じような状態になったことは事実である。

なお、シャルルー○世が人々から同情されなかったということと、彼を玉座から追放した人々が歓迎されたという

ことは同じではない。多くのフランス人にとっては、革命は確かに存在したかも知れないが、それはたんにシャルル一〇世が犠牲になった事件でしかなかった。いわばひとつの少数グループが、もっと小さな他の少数グループを打ちまかした出来事にしかすぎなかったのである。そこには、多くのフランス人の興味をそそるようなものはなかった。彼らの財産が危険にさらされたわけではないし、彼らの政治的権利が争点になったわけでもない。七月革命は、役者とほんのわずかな観客が関心を寄せた芝居でしかなかったのである。じつに観客の多くは、それに対して興味を示さなかった。そのため、だれが主役を演じているのかもわからなかった。国王は逃亡し、王党派は力を失ってただおし黙っているだけであった。自由派が勝利をえたことが、かろうじて人々の意識に昇ったにすぎない。共和派がなにをしたのか。また、パリの学生や労働者がなにを行ったのかについては、だれも気に止めなかったのである。

共和派は、自分たちの勝利がどのような意味をもつのかについて、ほとんど迷いを懐いていなかった。彼らは、自分たちの勝利は、自分たちに利益をもたらすのではなく、他の人々を利用するのである、という信念をもって戦いにのぞんだ。バリケード上で労働者といっしょに戦った学生たちは、「フランスは共和制を恐れている」ということ、また、「自分たちには力がないので、フランスを共和制にかえることはできない」ということをよく知っていた。学生たちは、労働者に、「憲章万才」というスローガンを掲げて戦うよう説得した。大切なことは、中産階級に恐怖心を懐かせないことであった。もっとも中産階級のなかには、反乱者に資金や武器を提供するものもいた。共和派は、革命の成功が確実になる段階以前から、革命開始時にとった戦術については後悔したが、共和制の樹立は強く望んだ。そのため共和派は、自分たちは、自分たちの力を過少評価してきたのではないかと反省した。こうしたことが重なったため、革命が勝利すると、共和派は、自分たち以上に他派の方が革命から利益をえていることに、激しい憤りを懐くようになったのである。

しかし、時はすでに遅かった。自由派は、戦わずして勝利をえた。すでに七月三〇日に、パリの街頭では、「憲章

万才」という叫びよりも、「共和制万才」という声の方が強くあがっていたが、ティエールは、地方は共和制を承認しないであろうと書いたプラカードを掲げた。そして彼は、できる限りオルレアン公の名前を訴えた。彼は、巧妙に自分の出番を窺っていたのである。自由派は、国王を追放するというのではなく、暴挙を慎しむように国王に進言すればよいと思っていた。しかし、国王が亡命してしまっており、また、ラファイエットのようなフランスで最も有名な人物が、思想的には共和派であると知られている場合、自由派としては、共和制を要求する声をどのようにして否定すればよいか、わからなかった。ティエールは、自由派が必要とすることは、できる限り応援した。彼は、地方は共和制を認めないであろうといった。共和制に固執することは、内乱の危機を招く可能性があったのである。

他方、バリケード上の人々は、「憲章万才」とさげんだ。彼らは、反動的な国王と戦い、憲法を守ろうと武器をとった。そして、フランスに新しい体制を押しつけさせなかった。もしシャルル一〇世が亡命したならば、それに越したことはないであろう。というのは、フランスにはブルボン家以外にも、国王や王族や国王殺しの息子であるオルレアン公などがいたからである。とくにオルレアン公は、憲法を尊重していると、人々から信頼されていた。じつに、シャルル一〇世の亡命は、共和派に思いもかけない好機をもたらすことになるのである。共和派は、その好機を活用しようとした。

だが共和派の好機も、ティエールによって、機先を制せられてしまった。共和派は、自分たちにはまだ力がないと弱気であったため、自分たちの意図しない所に追いやられても、それをね返せなかった。ティエールがラファイエットを説得し、オルレアン公といっしょに市庁舎のバルコニーに姿を見せるようにいった時、政治体制の問題は事実上決着した。すなわち、フランスは王政として残ることになったのである。それは、評判のよいイギリスに範を求めた議会王政であった。

共和派は、核心をなす問題で屈服した。オルレアン公を認めたのである。但し共和派は、オルレアン公を承認した

報酬として、何らかの譲歩がなされるものと期待した。具体的には、フランスにもっと民主的な憲法を定めるための憲法制定議会が開かれることを望んだのである。また、世襲貴族制の廃止も要求した。共和派は、つい最近までバリケードのうで戦ってきたが、その要求はあっさり拒否された。ここは共和派にとって、礼儀正しく振舞うことの方が得策であると思われた。

それでも共和派の要求は、誠実には取り上げられなかった。彼らは憲章のために戦った。すなわち、現在の体制を守るために尽力した。そうした共和派に対して古い自由派は、革命などなかったんだと苦しい言い訳をしながら、あなたがたは、ほんの数日前に自ら権利を放棄したが、その放棄に甘んじて欲しいといった。古参の自由派の言い分は、シャルル一〇世が退位したのは、彼が何の改革も行わなかったことと、憲章の擁護者たちが、あまりにも性急に彼に要求しすぎたことに原因がある、ということであった。すなわち、もしそのようなことがなければ、何も変化しなかったのである。といっても、ただひとつ例外はあった。それは、自由派が自分たちの遺産を継承しようとする際、それを阻止していた不法行為や陰謀が、今や葬り去られることになったのである。

## (2) 新自由主義派と穩健共和派

古くからの自由派は利己主義であり、共和派はもとより、新しい自由派からも嫌われていた。とくに、新しい自由派は、『グローブ』紙や『ナショナル』紙などを通して、自分たちの意見を表明していた。新自由派は、有権者の範囲が限定されているため、これではフランスに安定した清潔な政府を作ることはできないと思っていた。そこで彼らは、新憲法制定の必要性を感じた。しかも彼らは、共和派が革命を戦ったのに、古い人々が共和派の成果を横取りしてしまうのを見ていた。新しい自由派の人々は、古参の自由派が、革命の勝利が確実になる以前には、自分たちは反乱者とは無関係であると装っていたこと、また、革命前に欲していたものを手に入れると、今度はそれを放棄してし

まったことを目撃していた。シャルル一〇世の統治の末期、穩健共和派が、「天は自ら助くるものを助く」という結社をつくったが、それには自由派がかなり加盟したため、共和派的というよりも自由派的な性格が強かった。しかし、七月革命の直後、自由派はその結社から脱退してしまった。自由派の説明によると、戦術的に、一時的に共和派と同盟を結んだが、今やその目的は達成されたので、同盟は必要なくなった、というのである。さらにつけ加えていうには、それを行う価値がある時には、たとえ危険があろうともあえて挑戦を厭わない。しかし、慎重な振舞いが必要な時には、そのように振舞う、と。しかし、こうした考え方は、若手の自由派には衝撃を与えた。彼らは、賢い人間ならば困惑している友人であろうと平気で利用するという、そこまでの計略はまだ身につけていなかった。かくして若手の自由派は、自由主義を捨て共和派に走ったのである。

七月王政期を通して、『ナシヨナル』紙は、発刊停止期間を除いて、穩健共和派の中心的な機関紙であった。また、無政府主義を嫌い、民主主義を愛し、労働者に共感を示してはばからない人々の機関紙でもあった。これら穩健共和派の人々は、一八三〇年以前の共和派とは全く異質な存在であった。彼らは、貧しい学生や労働者ではなかった。富裕階級の生まれであり、教養のある中産階級であった。それらの人々は、一八三〇年の革命以後、共和派に転向することによって、共和派の勝利を横取りした人々以上に、パリケードで戦った人々に協力するとの意向をはっきりと表明した。だが、穩健共和派の人々は、教育レベルや出身階級からいうと、共和派の勝利を横取りした人々や古手の自由派の人々に近かった。彼らは、自分たちの兄にあたるそのような自由派に飽き飽きしており、強い祖国愛に燃え、寛大な気風にあふれていた。そして何よりも、フランスが公正で清潔な政治を行うことを望んでいた。

穩健共和派は、かのフランス大革命のことを学習するにつれ、自分たちは良家の出身で、愛国心に満ち、政治的民主主義・私有財産・人権を信奉し、無政府と暴民支配を嫌悪したジロンド党に立場は近い、との思いを懐くようになった。ところが後に、七月王政期の進行に伴って、この穩健共和派にも、とくにその第一線には、中下層階級の人々が

多く加盟するようになってきた。もし穩健共和派が、そのままの道を歩んだならば、そうした中下層階級の人々も、投票権をえることになったであろう。しかし、穩健共和派の指導者たちは、銀行家、商人、実業家ではなかったが、専門的な職業人であり、その身分は依然として上層中産階級に属していた。彼らは、一八三〇年当時、尊敬を受けていた理想主義者で、ジロンド党を賛美し、事物よりも言葉に、少し表現をかえると、事実よりも思想に、強い関心を懐く者であったが、こうした性格は、一八四八年になっても変わらなかった。

## 第二節 四種類の共和派

七月王政期の共和派と社会主義派の革命運動の歴史は、王政復古期におけるそれよりもはるかに複雑だが、大変に重要な問題である。その歴史を、簡潔かつ詳細に説明することは、不可能に近い。もし私がそれをできる限りわかり易く説明しようと思うならば、私はその歴史を分類し、細分化するしかない。私は、二つの悪のうちいずれかを選択しなければならぬとするならば、読者の頭を混乱させてしまうよりも、読者に誤解を与えてしまうかもしれないが、分類し整理する方を選び、この仕事を無事になしとげたいと思う。

### 四つの党派

私は、共和派と社会主義派を四つの主なグループに分類するとともに、七月王政期を三期に分けることにする。ただし、現実問題としては、この四つのグループが存在していたわけではなく、また、それぞれのグループを明確に他と分けることはできない、ということはお断りしておく。七月王政期には、無数の結社があった。その多くは、小規模で短命であった。また、結社の数を上回るだけの新聞もあったが、それらは発行部数も少なく、数ヵ月から数週間

の寿命しかもたなかった。こうした結社や新聞の活動を詳細に紹介することは、膨大な書物でないと不可能である。だが皮肉なことに、同時代の人々の関心を引いたのは、こうした結社であり新聞であったのである。ただ、私が分類した四つのグループは、当時、結社に所属し、新聞を読んでいた大部分の人には、どうしてこのように分類したかわからないかもしれない。その四つは、七月王政を振り返った歴史家たちが、自分たちにも理解できるように、あくまで傾向性を基準に区分したものだからである。もちろんそれ以外の分類方法も可能である。しかし私は、自分の方法が最適であると確信する。というのは、その方法は、革命の時代においては最も重要であると思われる区分に着目してなされているからである。私が考えた四つのグループとは、(1)穩健共和派 (2)ジャコバン派もしくは急進派 (3)社会改革派(4)革命派である。

### (1) 穩健共和派

穩健共和派については、すでに七月革命以後、若手の自由派が、決して尊敬することのできなかつた自分たちの兄をいかに見捨て、共和派になったか、ということの説明した時にふれた。ここでは、今や穩健派は、フランスで最大の共和派集団になったということ指摘しておけば十分であろう。穩健派は決して過激ではなく、秩序正しかった。それだからこそ、彼らは多くの人々の支持をかちえることができたのである。穩健派は、共和派の中でもただ一人、議会議野党との提携を望んでいた。彼らの主要な機関紙は、『ナシヨナル』紙であった。また彼らは、二つの重要な結社、「天は自らを助くるものを助く」と「出版の自由のための結社」を主導していた。政府をあからさまに批判する自由が許されている限り、彼らの行動は活発であった。彼らの行動は、他の共和派の活動よりも注目を集めた。弾圧の時や共和派に対する関心が低い時でも、彼らだけが議会で代表を送ったり、また、公共の出版物にさかんに登場したりした。その結果、穩健派が最も存在感があり、かつ目立つ存在になった。そして彼らは、反動が高まった時でも、

全面的に地下に潜行してしまうというようなことはしなかったのである。

(2) ジャコバン派、もしくは急進派

ジャコバン派、もしくは急進派は、穩健派と同じく共和主義を信奉し、成年男子の普通選挙権と社会改革をめざしていた。ただ彼らが、どのような社会改革をなそうとしていたかについては、穩健派と同じく必ずしも明確ではなかった。彼らは、社会問題よりも政治問題に興味をもっていた。彼らは穩健派と似ていたもので、この時点で両者を区別する意味はあまりなかった。両者の違いは、理論上のものというよりも、多分に氣質的なものであった。ただこの点は重要な相違であり、一八四八年の革命以後に、その差が明確に出てくるのである。

① ジャコバン派

ジャコバン派の指導者たちも、ブルジョア階級の出身であった。しかし、一八四八年の革命の時には、彼らは自分たちはブルジョア階級の出身なので、その階級には愛着をもっているが、しかし、それに劣らないほど、労働者階級にも共感を懐いているということを示して見せた。彼らはジロンド派ではなく、ロベスピエールやマラー、そして、国民公会やコミューンのことを称賛していた。同派の中心はパリであった。彼らは、プロの革命家ではなかった。陰謀や暴力よりも、改革や平和的な宣伝の方を好んだ。しかし、陰謀や暴力が濺発するようになると、彼らは陰謀をはかった人よりも、当局の方を責めるようになった。彼らは、労働者やバリケードで戦った人を見捨てることは、共和国や偉大な革命に対する裏切りであり、背信行為ではないか、と恐れにも似た感情を懐いたのである。彼らは、一七九三年から九四年にかけての恐怖政治を嫌ったが、しかし、テロリストたちを責めることはしなかった。彼らは、ロベスピエールを崇拜したが、ロベスピエールとは違って、目標を達成するのに暴力を使うことは好まなかった。ただ彼らには、万が一にも暴力が回避できないような状況になった場合、どうすればよいのか、その解答はもちあわせて



いなかった。

## ② 急進派

急進派もまた、とくに貧しく恵まれない人々を中心とする下層中産階級の中に強い支持者をえていた。急進派は、そうした人々を通して、労働者とのつながりをもっていたのである。彼らは穏健派と同様に、労働者とはあまりにもかけ離れた立場にいたので、労働者に完全に共鳴していたというわけではなかった。それだけに、労働者たちが若手の寛大なブルジョア階級の基準にそった行動をした時、彼らは労働者を賞賛した。急進派は労働者の立場についてはよく理解していた。また、労働者たちが自分たちのことを理解し、好意をもってくれるかどうか心配した。他方、穏健派は、上層階級の考え方をほぼそのまま受け継いだ。すなわち、自分たちは労働者のことをいつも真剣に考えており、それは、労働者が自分たちについて考えている以上に真剣である。それだけに、もし労働者たちが自分たちを失望させるようなことがあれば、彼らとしてもやり場がなかった。しかし、ジャコバン派は、少なくとも自分たちが労働者の期待に背くようなことはしまい、と心を砕いていたのである。

## ③ 急進派のリーダー

穏健派とちがってジャコバン派は、議会野党とのつながりはあまりもたなかった。ジャコバン派は、むしろ自分たちよりも、もっと急進的なくつかのグループと接触をもっていた。ジャコバン派は、二つの重要な結社を擁していた。「人民の友」と「人権委員会」である。それには、革命家と名乗る人々も多く参加していた。七月王政の初期、急進派のリーダーの中で最も傑出した人物は、一八四五年に死去したゴッドフロワ・カヴェニャックであった。彼の後をついだのがルドリュエー・ローランである。ルドリュエー・ローランは、一八七〇年に共和国が最終的に樹立されるまでのフランスにおいて、共和派の中で最も重要な人物であった。七月革命の直後、急進派の新聞の中で、最も影響力があったのは、『トリビューン』紙であった（その編集長のファブルは、七月二七日、労働者や学生を扇動し、革

命を主導した。また、一八四三年以後は、『レフォルム』紙が影響力をもった。ここでは、こうした事実を紹介するだけに止めるが、この事実がいかに重要であるかは、後にわかるであろう。

### (3) 社会改革派

第三に、社会改革派についてであるが、ここでいう社会改革者とは、社会主義者であろうとなかろうと、社会問題を政治問題として取り上げようとした人々のことを指す。彼らは、デモクラシーについて、次のように考えた。すなわち、それはどう鼻目にみても、目的そのものではなく、むしろもっと重要な、目的に対する手段ではなからうか。具体的には、貧しい人々のために、彼らが見苦しくないような生活を送れるだけの、物質的な条件を保障すること。これこそがデモクラシーであると。

#### ① サン・シモンとフーリエ

七月革命のあと、『グローブ』紙を発行していたサン・シモンの弟子たちのような人々には、デモクラシーは用はなかった。フーリエの弟子たちのような人々は、社会が上から再組織されることを期待した。社会主義思想の歴史において、サン・シモンとフーリエの学派は、重要な地位を占めている。だが、彼らの政治に対する影響力はそれほどでもなかった。彼らは、人々が望んでいるのは何なのか。社会主義なのか、または、社会改革なのか、ということをつきつめて考えるようなことはなにもしなかった。私は本稿では、民衆運動について取り上げているので、サン・シモンやフーリエ学派の、社会主義でいくべきか、または、社会改革か、という問題については、とくに詳しい言及はしないつもりである。ただ、両者について一言つけ加えるならば、それら学派の影響力は、一八三〇年以前よりも七月王政期に入ってからの方が強かったといえよう。もっともその影響力は間接的なもので、サン・シモンやフーリエの鋭敏な知性がそのまま反映したものではなかった。

## ② ラスパイユ

パリの労働者にとって、名前だけではない実質的な最初の社会改革者はラスパイユであった。彼は純理派でも政治家でもなかった。彼の職業は科学者であり、臨床医であった。細菌学者パスツールの先を行く、微量化学の創始者の一人であった。彼は、仕事上貧しい人々と接触する機会が多かった。そのため彼は、それらの人々を救済する必要性を痛感した。具体的には、貧しい人々に自助の重要性や、政治的な組織化、そして同盟者を確保することの必要性などを説いたのである。また、自分たちの要求を無視することは危険である、ということを担当にわからせる位の力をつけなければならぬ、と勵ました。ラスパイユは、扇動的な政治家でも革命家でもなかった。彼は、最初の共和国の英雄たちを嫌ったし、人格的にも野心家ではなかった。彼は、金持ちが貧乏人に対して無関心であることは許されないという信条をもつ、正義感あふれる科学者であったのである。

ラスパイユは一般にいうところの政治家ではなかったが、それでも実際は、政治行動家であった。彼は、急進共和派が主導権を握っていた結社、「人民の友」の有力な一員であった。彼は、一時、自分の新聞『改革者』紙を発行し、その中で、男子普通選挙制、平和主義、農業協力、累進課税、刑務所改革などを提唱した。彼は、これらはすべて社会衛生上の措置であると主張したのである。すなわち、社会は病んでいるので、健康を取りもどす必要がある。もし人々が、とくに高い地位にある人々が、正気を取りもどすことができるのであれば、多少荒っぽい治療も、時には必要であったのである。

ラスパイユの行動は、つねに慎重というわけではなかった（彼は一八三〇年と一八四八年の二つの革命に参加した）。かといって、革命家を公言していたわけでもない。彼は、階級闘争というとらえ方はしなかった。パリの労働者の間で、彼は長い間、特別な地位を占めていた。すなわち、彼は労働者の尊敬、信頼、感謝の対象となっていたのである。

## ③ コンシデランとルロー

私がかここで用いる社会主義という言葉は、富裕階級による貧困階級の搾取を防止するための経済の社会的統制を説く理論という意味であるが、それは、一八四〇年代以前には、労働者階級にはほとんど影響を与えなかった。サン・シモンは一八二五年、バザールは一八三二年、フーリエは一八三七年に、それぞれ死去した。すなわち、フランス社会主義を打ち立てた三人の父祖たちは、労働者階級に福祉の恩恵を授けてくれる理論が、労働者たちの間に浸透する前に死んでしまったのである。社会主義者の宣伝が効果を発揮するようになったのは、ルイ・フィリップの統治時代の後半以降になってからであった。フーリエの弟子、ヴィクトール・コンシデランが活動を開始したのは、一八三二年以後である。また、サン・シモンとバザールから社会主義を学んだピエール・ルローは、彼よりも少し早く立ち上った。二人とも作家であり、その作品は皮肉なことに、有識者の間よりも一般大衆によって広く受け入れられた。二人の成果は、それまでの識者たちの思想を、一般の人々にもわかるように解釈し直したものであったので、本来ならば、そうした識者たちからもっと賞賛されてもよい筈であった。

## ④ カベとルイ・ブラン

それはともあれ、二人をそのように評価したからといって、パリの労働者たちに社会主義を教えたのは、じつはその二人、コンシデランやルローではなかったのである。それは、カベとルイ・ブランであった。労働者と社会主義が結合したのは、第二共和政の時代であり、それはある重要な結果をもたらすことになった。

## ① カベ

カベは、言葉の古い意味での共産主義者であった。彼は、革命をはじめとするいかなる種類の暴力を否定した。彼は、もし私が、革命の主導権を握るようなことがあれば、たとえ私が亡命し、死に追いやられるようなことになったとしても、革命が暴走するようなことは阻止するであろう」といった。彼は、成熟した共産主義と完全な民主主義

を主張した。すなわち、すべての人々が自分の生活に必要な賃金を与えることができること、権力を行使する人は選挙で選出されること、を訴えたのである。彼には、階級の違う人々が互いに反目しあうということが信じられなかった。彼はキリスト教そのものは否定しなかった。キリスト教は、キリストの教え自体は大変に良い教えである。ただ今日、教会によってその正しい教説が歪められてしまっている、というのが彼の認識であった。

カベの最も人気のある作品、『イカリー旅行』は、一八四〇年に発刊された。彼の日曜日発行の新聞『人民』紙は、一八三〇年代に広く労働者に読まれた。しかし、彼がそれを共産主義を啓蒙するために使用するようになったのは、彼がイギリスでの亡命生活から戻って後の、一八四〇年代になってからであった。警察はカベを警戒していなかった。というのは、彼は労働者を扇動して、労働者に暴力を働かせるというようなことはしなかったからである。彼は、自分が描く共産主義社会はまだはるかかなたにあると認識していた。彼は、労働者たちに、共産主義社会は長年にわたる忍耐と、善行の報償としてえられるものであると説明していた。警察は、むしろカベは、革命家たちに対して良い影響を与え、善悪を矯正する存在であるとみなしていた。すなわち、彼は労働者に対して、秩序を保ちながら夢を実現することを教えたのである。

警察は、ある男の主張がつねに変わることなく説得力をもつとは限らない、ということを失念した。カベが描いた共産主義社会は、労働者が知っているパリとは全く異質なものであった。それだからこそ、カベは労働者たちに、共産主義社会こそ唯一の公正な社会であると強調した。労働者が現実に生活している社会は、労働者の労働があればこそ成り立っている社会であるが、その割には、労働者は報われていなかった。じつに不公正であり、労働者の犠牲は大きかった。だがカベは、こうした労働者たちに対して、辛抱強くあれと忠告していた。この忠告は、はたして適切であったのであろうか。労働者は、なぜ忍耐強く苦役に耐えなければならぬのであろうか。彼らはかつて、暴力を用いて政府を転覆させたこともあった。だが、暴力から得たものは少なかった。もっともそうなのは、労働者と

同盟していた勢力が、労働者をだましたことによるものだったが。ただ、得た利益は少なかったとはいえ、労働者たちは、自分たちのもつ力については実感することができた。それゆえ、労働者の機嫌を損わないことが、富裕階級にとっても優先課題となったのである。ともあれカベは、忍耐を説いたけれども、労働者たちに対しては、違った方法を教えた者がいた事も事実である。

② ルイ・ブラン

もしカベが、労働者たちに夢を追うように教えたとするならば、ルイ・ブランは、彼らにもっと現実を直視するように教えたということができであろう。ルイ・ブランもまた革命家ではなかった。たんなる理想主義的な平和主義は説かなかつた。彼は、ジャコバン派やルドリュウ・ローランの友人であつた。じつに彼は、社会主義者でもあり、急進共和派でもあつたのである。

彼自身は革命的な暴力は提唱しなかつたが、一七九三年から四年にかけてのジャコバン派の英雄たちについては尊敬していた。それらジャコバン派たちの権力の秘密は、一方では、情容赦ない暴力、もう一方では、パリの労働者たちの熱烈な支持にあつた。ルイ・ブランの社会主義は、カベのそれよりは現実的であつた。すなわち、ルイ・ブランが描いた理想社会は、当時のフランスの状況を全く無視したものではなかつた。しかも彼は、その理想社会は平和的な手段によって達成される、と信じたのである。

とはいえ当局は、カベよりもむしろルイ・ブランの方を警戒した。ルイ・ブランは労働者たちに、もし政府がその気になれば、労働者を救済するための手だてはすぐにも講じることができるのである、と語つた。彼は、フリーエやその弟子たちが考えたような、共同生産のための自発的結社が成功するとは思わなかつた。また、私有財産の全面的な廃止も提唱しなかつた。すなわち、ルイ・ブランは、集団主義とフリーエ主義の中間の立場をとつたのである。彼によると、国家は銀行、大工場、鉄道、保険会社をコントロールすればよく、小規模の生産工場はすべて私企業に

委ねる。ただし、私企業部門についても、もし労働者が希望すれば、国家は共同組合、もしくは、ルイ・ブランが名付けた社会工場を設立しなければならない。しかも国家は、そうした工場をコントロールするのではなく、あくまでもそれを設立するのに必要な資本を提供すればよいのである。

一八三九年に発刊された『労働組織』という題の本の中で展開されたルイ・ブランのこの理論は、一八四八年には、労働者たちのスローガンのひとつになった。一八四八年当時のルイ・ブランは、フランスで最も影響力のある、おしもおされぬ社会主義の理論家であった。

ルイ・ブランと同世代のブルードンは、まだ実際それほど人気はなかった。階級闘争と国家の死滅を強調する彼の社会主義者としての影響力は、一八四八年以前よりも、それ以後になって発揮されてくるのである。一八四八年以前には、労働者たちはまだ希望にあふれた、激しい口調ではない予言者の言葉を聞きたがっていた。一八三〇年に、彼らは欺かれ、しかもその後、厳しい仕打ちにあった。とはいっても、労働者たちが多数、パリの街頭で、突然鉄砲で撃ち倒されるといようなことはなかった。階級闘争やブルジョア国家に対する激しい憎悪の理論も、まだ彼らには実感として感じられなかった。それがはっきりしてくるのは、一八四八年六月以後である。

#### (4) 革命派

##### ① 性格

私が最後のグループとしてあげる、自称、革命派たちは、共和派のすべてのグループと同様に、理論家ではなかった。革命家であり社会主義者でもあるブルードンやマルクスの難解な理論は、まだ知られていなかった。ブルードンの名声はすでに広まっていた。彼は、すでに財産についての有名な疑問を提起しており、財産を窃盗と呼んでいた。だがマルクスについては、その存在すら噂になっていなかった。ブルードンが、一九世紀の四分の三ほどの期間、フ

ランス社会主義を牛耳ったとするならば、マルクスは、残りの四分の一を支配したといえよう。

一八四八年以前においては、フランスの革命的社會主義は、理論というよりも、陰謀とか無謀な冒険とかを表わす言葉であった。それら革命家たちは、秘密結社を組織したり、陰謀を計画したりした。そのため彼らには、社會問題について議論する時間的余裕などはなかったのである。

## ② バブーフ

革命的社會主義者のなかで、第一共和政の時から英雄だったのがバブーフである。彼は、一七九六年に反動派に対する陰謀を企てた。七月革命から一、二年たつて、バブーフの片腕の一人ブオナロッチが、この陰謀を本にまとめ、『平等者の陰謀』として発表した。この本は、たちまち革命家たちのバイブルになったのである。

## ③ オーギュスト・ブランキ

革命家のなかで最も有能なのが、オーギュスト・ブランキであった。彼はつとめて理論はもたないようにした。だが、一九世紀の時代状況は彼に極めて厳しく、結局彼も、自分の生き方の正しさを証明するために、『社会批判』という本を書くことになった。この本の中で、彼は確実な根拠もなく、前もって未来構想を打ちたてることは、かえって害になる、と述べた。革命家は、未来のことは未来自体に委ねればよい。未来のために実行できるのではないかという計画を考えている人は、本質的には変わることはないであろうあるシステムの中で、一生懸命なされるべき変革について思いをめぐらしているようなものである。彼の目的が、そのシステムを破壊することにあるとするならば、その廃虚のなかから生まれてくるものについて、彼が前もって計画をたてるというようなことは無意味である。彼が予測できない不確定要素はあまりにも多いのである。結局、革命家の目的というのは、人々にある機会を譲ってあげることであり、人々を過去の呪縛から開放し、新しい社会を形成できるようにしてあげることである。すなわち、未来の世代の仕事を、前もってお膳立てしてしまうのは、革命家ではないといえよう。



ブランキが革命家になってからしばらくして唱えられたこの理論は、本質的には革命を理論なしで行うということ  
を弁明するためのものでしかなかった。ブランキが若かった時、人々は不正を憎むがゆえに、また、ありあまるエネ  
ルギーをもっていたがゆえに、不正と戦った。ブランキは年をとるにしたがって、プルドンやマルクスのような人々  
の影響とも競い合わねばならなくなった。そこで彼は、自分の過去を正当化するために、理論を生み出したのであ  
る。彼には、民衆を味方にするという意識は全くなかった。破壊作業は、強固な意思をもった少数者によって行われ  
るのが一番よい。すなわち、ブランキが求めたのは、自分と同じ意思堅固な、勇気のある知謀家であった。彼は、そ  
のような人物はなかなかいるものではないということには自覚していた。

ブランキは、一九世紀の最も偉大な革命の指導者であった。彼は、一八二七年から一八七一年まで活動したが、そ  
の生涯の大半は獄中ですごした。彼は、若くして伝説的な人物になった。彼には休む間もなく、出所するやすぐに秘  
密結社を結成し、陰謀を企てた。人々は、彼についての消息を聞くことはあっても、彼に会うことはほとんどできな  
かった。出所中も、彼はほんの数週間、ないし数ヶ月間という短かい期間を除いては、大抵地下に潜行していた。数  
年間、同志と離れて生活することもあった。その数年間のうちに、パリの労働者は力を増強させた。彼が公けの場所  
に姿を現わした時、彼が扇動した「恐るべき輩」のことについては、トックビルの『回想録』の一文のなかに詳しい。  
トックビルは同書の中で、一八四八年五月一五日、パリの暴徒が国民議会の中に乱入してきた時の模様を記述してい  
る。誇り高い階級にとっては、ブランキの姿が見えただけで、フランスは呪われているかのように思えた。彼らはま  
るで、ブランキのような男が暗闇から出てきて、陽光に入ろうとするから、社会の土台が崩壊するのであると、信じ  
ているかのようにであった。

ブランキは、富裕階級が彼を恐れれば恐れるほど強くなっていった。彼は、数千人以上の支持者はもととしなかつ  
た。それでも彼は、長い間、パリの多くの労働者の崇拜の対象であった。彼はほとんど姿を見せない、いわば見えざ

る偶像であったが、それでも姿を現わした時は、じつに大きな力を発揮した。労働者たちは、自分たちにとって最善の人はだれか、また、本当に愛情を感じられる人はだれか、ということを知っていた。

とはいえ労働者は、ブランキには一種恐れにも似た畏敬の念を懐いており、彼が醸し出す恐怖感、強大な軍隊がもつ威圧感に似ていた。たとえ何度失敗しても、彼の名声はびくともしなかったし、彼が喚起した恐怖感、弱まることはなかった。労働者たちが、独立と権力をかちえようと最大の力をふりしぼって形成したパリ・コミューンの末期、彼らはブランキをリーダーにと望んだ。また、多くの労働者は、もしブランキがパリにいたならば、パリ・コミューンはあのように簡単には失敗しなかったであろう、と悔んだのである。

七月王政の時代、フランスにはクレオール人バルベ、印刷工マルタン・ベルナル、そして、アルザスからの予言者アロアジュース・ユベールなどの革命家がいた。彼らは当時、人々から信頼された指導者であった。だが、革命運動にとっては、ブランキの価値は、それら指導者すべてを合わせたよりも、はるかに勝っていた。

##### (5) 革命指導者像について

私は、共和派や社会主義派を四つに分類し、簡単な説明を加えてきた。私は、この分類が完璧なものであるなど、と自負するつもりは全くない。その分類は、あくまでも便宜的なものであり、私はそれにこだわるつもりはない。ともかくその分類は、信奉者に焦点をあてたものではなく、あくまでも指導者を基準に分類したものである。指導者たる傑出した人々は、傑出しているがゆえに首尾一貫しているように見せたがる。指導者としての名声も問われる。彼らは、自分たちが懐いている期待感と同じ期待感を人々の中に懐かせた。指導者は、政治の世界で自分たちが果たす役割をもっている。もちろん彼らは、時代とともに変わらなくてはならないし、そうでないと自分たちの影響力を喪失させてしまうであろう。とはいっても、急激に変わる必要はない。指導者は、一般の人々が懐いているイメージに適っ

ているということが肝要なのである。

## (6) 暴力に対する態度

### ① 職業的革命家

共和派や社会主義派の四つの分類の中で、ただひとつの、最も小さいものは、職業的革命家である。彼らは、何らかの形で革命運動にかかわってきた。とくに、一八四八年の革命においては、それぞれ看過できない役割を果たした。彼らは、たんに政権をもつ政府の反対者というだけではなく、体制そのものに対する敵対者であった。彼らのうちの多くは、暴力が現実にもつ騒音、痛み、においては嫌ったが、それでも革命が有する道義性については強い信念を懐いていた。人民によって、もしくは人民の名においてなされたことは、彼らにとっては神聖な義務そのものであった。たとえ政府が不正な統治をしようとも、たとえ政府が最初の革命の偉大な原理をふみにじろうとも、たとえ人民がそれに反抗しようとも、人民が行ったことは正統であり、すべての善意ある人々によって受け入れられるべきである。合法的だからといって、正義に対して暴力をふるうことは、法を犯すことよりも悪である。

### ② 穏健共和派と暴力

暴力を主張せず、暴力を嫌った穏健共和派も、当然この考え方には賛同した。彼らには血を流すことはできなかった。しかし彼らは、血を流したいと思っている人々からしばしば尊敬され、それと同盟を結ぶこともあった。彼らは義務感から警官に公然と齒むかい、殺すことのできる人々を知っている人と知己であった。我々は暴力を行使できないし、賞賛することもできない。だからといって、暴力を性急に否定することもできない。もし暴力が発生し、人々がそれを支持し、かつ、暴力でフランスを統治することができるようならば、我々はそれを、悪しき政府に対する判決文として認めざるをえない。一八三〇年から一八四八年の二月革命直後までの間の穏健共和派の感情は、以上のよう

なものであった。穩健共和派にとっては、二月革命の時、自分たちより左側に位置していた同盟者は厄介物になりつつあった。穩健共和派は、臆病物の代名詞ではなく、むしろ人々から、急進的だが過激ではない考え方のもち主として尊敬された。彼らは、自分たちが危険だと思うことを、他人にやらせるようなことは決してしなかったのである。

### ③ 新ジャコバン派

新ジャコバン党は、最初の革命の時に暴力を行使した自分たちの祖先を精神的には崇拜し賛嘆していたが、自らは暴力から一線を画していた。彼らもまた臆病者ではなかった。彼らは穩健共和派とは別の危険を犯し、警察かららまれていた。しかし、彼らは街頭闘争は信用しなかった。他方、彼らは学生や労働者と同盟を結び、たとえ学生や労働者が暴力を行使しても、彼らと袖を分け、対立するようなことはしなかった。

### ④ 社会改革派

ラスパイユ、ルイ・ブラン、ブルードンのような社会改革者たちは、労働者たちの信条をわが信条として受け入れた。彼らは決して暴力に訴えることはしなかった。だが、彼らが暴力は避けられないと判断した時は、それにかかわった。また、彼らが武装闘争に直接関与していない時、政府が暴力を行使するようなことがあれば、政府を激しく非難した。革命はできれば回避されることが望ましい。しかし、もし時宜をえた改革によって、革命を阻止することのできる人々が、革命の方を選択したとしても、それは必要なことであり、誤りではないとした。

これら四種類の共和派の人々は、フランスは二つの陣営に分かれていると認識していた。すなわち、一方は、政府や特権階級であり、他方は、自分たちの支持基盤である民衆である。この政府と民衆の間の政治闘争は、いつも同じ性格のものであったわけではない。しかし、その闘争が暴力的な性格を帯びると、穩健派から革命派に至るまでのすべての共和派は、いつも決まって政府の方を非難したのである。

私は、これら四種類の共和派が、当時の人々によってはっきりと色分けされていたわけではない、ということはず

でにことわっておいた。共和派の人々といっても、沢山のいろいろな結社に所属していた。また、それら結社は、さまざまな形の結び付きをもっていた。当時の人々は、共和派を、穩健派と急進派、もしくはジャコバン派に大別していた。私が、社会改革者や革命家とよんだ人々については、当時の人々は、それは他の派よりももっと急進的であると考えていた。穩健派は、パリや他の大都市だけではなく、フランスのすべての地方にある、沢山の小さな都市でもかなりの支持者をえていた。穩健派の人数は、他の共和派すべてを合わせたよりも多かった。パヤコバン派や社会改革者や革命家は、リヨンをはじめ他のいくつかの工業都市にも同志をもっていたが、それでもパリが一番の拠点であった。

#### カトリック自由派

共和派以外に、フランスで次の革命の準備を手助けした第五番目のグループに入る一派があった。それは、カトリックの自由派である。これまで説明してきた四種類の共和派とは違って、カトリック自由派は、大革命の落し子でもなければ、いかなる意味においても、最大限ゆるやかに解釈しても、革命を弁護するような人々ではなかった。しかし、彼らはカトリックのなかでも、民主主義を最初に評価した人々であった。しかも、彼らが民主主義を賞賛することによって、それまで共和派のいうことには全く耳を貸そうとしなかった人々が、民主主義というものを見直すようになったのである。

#### (1) ラムネ

フランスでカトリック自由主義を樹立したのは、ラムネであった。彼は最初は、ガリカニズム（教皇権の制限を主張したフランスカトリック主義）の敵として注目された。

復古王政の時は、高僧の中にはまだ多くのフランス教会派がいた。同派の人々は、教会のための自由を主張する二種類の人々から批判を受けた。一つは、革命の政治的結果を受け入れ、教会が国家からの干渉を受けないことを望むカトリック派であり、もう一つは、やはりカトリック派であるが、革命を激しく嫌悪し、そのため革命によって汚された国家に、教会が何らかの形でかわりをもつことを拒否する人々である。ポナール、メーストル、ラムネらは、この後者のグループに入る。当時ラムネは、民主主義には全く関心をもっていなかった。彼の眼中にあったのは、教会の自由と純粋性をどのようにして保持するかということであった。

一八三〇年の革命によって、ラムネははじめて民衆に注目した。民衆に語りかけることを要求した共和派の人々は、ラムネと同様に情熱的であった。ラムネは、次第にそのような共和派に対して共感を懐くようになった。一八三〇年一〇月、彼と友人のモンタランベール、ラコルデルは、カトリック的で、自由主義的な新聞『未来』を創刊した。そのなかで彼らは、教育・結社・出版の自由など、すべての精神的事柄に関する教会の完全な独立、分権制、政治的民主主義を主張したのである。

彼らは、かつての黄金時代、教会は人間性と自由の友であった、と述べた。教会が説く教義は真理そのものであり、それゆえ教会は、科学や自由研究に対して恐れを懐く必要はなかった。また、教会はその博愛の精神からいって、つねに民衆の友でなければならぬ。教会は、神がすべての民衆に下賜した賜物であり、地上のすべての制度の中で、教会こそが最も親しまれるものでなければならなかった。

『未来』のもつ熱狂的な情熱、果敢な論陣、そして自由主義は、フランスの司教たちを怒らせた。司教たちは、ローマでの自分たちの影響力を駆使して、ローマ法王グレゴワール一六世に対し、ラムネに偏見を懐かせ、敵視するようにはかった。そのためラムネは、法王をたずね、彼への支持は変わらない旨表明しようと決意した。彼は複雑に物事を考えない性質だったので、ローマが彼についてどう思うかなど詮索しなかった。グレゴワールは、ラムネのことを

賞賛もしなければ責めもしなかった。ただ待機させるにとどめた。結局ラムネは、ローマの練達な、即断しないやり方にしびれを切らし、フランスに戻ることにした。彼がミュンヘンに着いた時、法王の回勅『汝らを驚かしめ』<sup>ミラーリ・ヴェス</sup>が出版された（一八三二年八月一五日）、自分が説いてきた教義がことごとく非難されたことを知った。彼は最初は我慢した。しかし、フランスの司教たちが予想もしない勢いで、ラムネに服従を迫ってきた時、彼はついに反抗の火ぶたを切った。一八三四年、彼は最も有名になった著書『信者の言葉』を発売し、その中で、自分は完全に民主主義に転向したと宣言した。一八三〇年代当時の民主主義は、共和主義を意味していたのである。

ローマ法王は、『信者の言葉』を非難する特別の回勅を出したが、それを機にラムネは教会を去った。ラコルデーやモンタランベールをはじめ彼の友人たちは、宗教を捨て、無宗教になることはできなかった。だが彼らは、ラムネに対する尊敬と慕慕の念は懐き続けた。ラムネは、たとえ彼の意見が友人たちに受け入れられない時があっても、友人たちにはつねに大きな影響を与え続けた。

## (2) モンタランベール

モンタランベールは、カトリック議会党を結成した。同党は、当初は君主政体に反対したが、すぐにそれと和解した。しかし同党は、政治体制は容認しても、君主の政府には終始一貫して反対した。じつに同党は、かつての自由派よりもはるかに自由主義的であった。モンタランベールの党は、一時期、共和的になったが、君主政に対しては、決して好意を懐くことはなかった。同党は、各王朝に忠誠を尽しているかなり多くのカトリック教徒を、各王朝から離反させた。また、たとえ共和派との同盟に傷がつくようなことがあっても、教会の利益を第一に考えるように信者に説いたのである。

## (3) ラムネと共和政

ラムネは、自らは党派を形成することはしなかったが、モンタランベール以上に、共和派の運動に身を入れた。彼は、彼の生き方とは全く別の生き方を信条とする人々の間でも大変な人気を博した。人々は彼を信頼し、尊敬していたので、彼が熱く崇拜するものならば、同じように崇拜した。ラムネは、カトリックを信奉するフランス人に、感情的なものかも知れないが、民主主義と共和主義に対する威信というようなものを植えつけたのである。カトリック教徒ならば、おそらくショックを感じるであろうな言葉や考え方をカトリック教徒になじませた。彼はまた、人々に、ルイ・フィリップ政府のもつ冷淡さ、利己主義、学識ぶった態度、偽善性などを唾棄するように勧めた。ラムネのこのような働きかけにより、人々は七月王政を軽侮するようになったのである。

一八四八年の二月革命以後数ヶ月もたたないうちに、フランスは共和政を受け入れるようになった。一八一五年には、上流社会では全く語られていなかった言葉、一八三〇年七月には、地方ではまだ不快感をもって語られていた言葉、そうした言葉が、しばらくの間だが、多くの人々の口にのぼるようになったのである。第二共和政は、日がたつにつれて、当初の熱狂ぶりは冷めていったが、それでもそれが誕生した時は、国をあげて歓迎され喜ばれたのである。だが正確にいうと、当時フランスは共和政を望んでいなかった。フランスが、共和政を快く受け入れるようになったのは、じつにラムネによるところが大きかったのである。



一八三〇年七月から一八三五年四月にかけての革命運動

(1) 共和派の運動

私は先に、七月王政期の革命運動は、それを便宜的に三期に分けることができるといった。

第一期は、一八三〇年七月から一八三五年四月までである。この時期には、四つの主な共和派の結社と多くの共和派の新聞が活発な運動を展開した。共和派は、今日でいう「宣伝」活動を初めて大々的に取り入れた。これ以後、フランスにおいては反体制派が政府を攻撃する時、その武器として宣伝を利用するようになったのである。共和派はいわば土台を作ったといえよう。

共和派は、シャルル一〇世に反対するフランスの新興勢力である自由派と同盟関係を結んだ。彼らは共同で、ある原則を打ち立てた。だがその結果、自由派にとっては、その原則が自分たちの利益に合わないからといって、すぐ破棄するようなことはできなくなった。自由派は、他派より激しい、極論とまでいかなかった。何かにつけて文句をつけたがる傾向にあった。自由派は、当初はその原則を遵守するつもりであった。しかしやがて、その原則が自分たちの足かせになるということに気がついた時、遵守するかどうか巡俚するようになった。しかも、共和派が一八三〇年以前ならば、あるいはどの派も行っている、それほど問題にはならないと思われるような要求を、やがて強く主張するようになってきた。それがあまりにも無暴と思えた時、自由派はついに、共和派の動きを阻止しようと決意した。そうしなければ、自由主義の原則が乱用され、社会が混乱してしまうと思ったからである。

とくに共和派の要求は、たんに憲法議会や選挙権の拡大だけにとどまらなかった。共和派の中の最も穩健な人たちでさえも、男子普通選挙権を下回るものには断固反対した。まして急進共和派は、累進課税、国民兵の民主化、貧困

家庭の子弟のための無料小学校の開設、そして、援助を必要とする貧困者に対する国からの信用貸し、などを強く要求した。共和派は、七月革命の激化を内心では当然と考えていた。共和派の前述のような貧困者のための要求は、内容によっては、一八三二年以後のイギリスのチャーチスト運動のそれよりも、はるかに急進的なものであった。こうした点を考えると、自由派が共和派を恐れ、反動的な態度をとるようになっていったのもやむをえない面があったといえよう。

七月革命後の九ヵ月間、政府は共和派に対して何の手も下さなかった。政府は、共和派がとてつもない要求を出してきたのは、勝利の美酒に酔った勢いからであり、時が経てば妥当な線に落ち着くであろうと楽観していた。だが、共和派は、いつになっても穏当な状態には戻らなかった。いなそれどころか、今回の好機を自分たちに与えられたままとなないチャンスととらえ、それを最大限利用して国民の考え方を変えようとしたのである。共和派は新聞を多数発行し、結社の発展に力を入れた。その結果、共和派は国民の間に深く浸透していったのである。こうしたなかで、自由派の反撃が始まったのは、一八三一年初頭、銀行家のカジミール・ペリエが内務大臣に就任した時からであった。

## (2) 「天は自ら助くるものを助く」と「出版の自由のための結社」

共和派の四つの大きな結社のうち、穏健派によって主導されていた「天は自ら助くるものを助く」と「出版の自由のための結社」は、合法的な活動だけを行った。もっともそうはいっても、その二つは、しばしば政府によって起訴された。これら結社の目的は、共和派の新聞に財政的な援助を行うことにあった。共和派の新聞がない所では、その発刊につとめたり、それが告訴された場合は、弁護士を派遣したりした。必要な時には、彼らの罰金を支払うこともあった。

出版の自由は、一八三〇年以前ほどではないにせよ、かなり厳しい法的規制を受けた。その法律は、かなり難しい

解釈の余地を残していた。政府はしばしば、公平な判決が下され、それが自分たちに有利になるように期待して、告訴を行った。政府は当然のことながら、共和派よりも経済的に豊かであった。それだけに、もしこの貧者に対する富者の法的な戦争が長期化すれば、政府側は共和派を破滅させ、彼らの活動を不可能な状態に追い込むことができるであろうと考えた。しかし共和派は、たとえ資金的には苦しくなり、涸渇しそうになっても、政府のこうした策略に怒りをぶちまけるようなことはしなかった。政治的な裁判は、重要な公共の事柄である。共和派は有能な弁護士を抱え、裁判にのぞんだ。その結果共和派は、本来ならばかなりの金額をつぎ込まなければ手に行きかねるような評判を、しばしば裁判で勝ちとることができた。いわば政府の費用によって、共和派はその名声を獲得することに成功したのである。

### (3) 「人民の友」

他の二つの結社は、ジャコバン派の影響を受けており、かなり危険視されていた。それらは地方では、あまり影響力はなかったが、パリとか、いくつかの大都市においてはかなりの力をもっていた。彼らの影響力は、中産階級にとどまらず、失うべき財産を殆ど、もしくは、全くもたない多くの貧しい階級の人々にも及んでいた。彼らの要求は過激で、革命家たちがそれを利用するにはじつに都合がよかった。

「人民の友」は、決して大きな結社とはいえなかった。メンバーが六百名を越えることはなかった。しかし、会員には急進共和派だけでなく、ラスパイユやブランキもいた。カジミール・ペリエ内閣の時、それは一時、政府転覆のための激しい活動を行った。だが、その結社にとって最後の、最も危険な時期、すわなち、ラスパイユが主導権を握った時、それは一切の暴力思想を放棄した。ラスパイユの指導のもと、その結社のメンバーは、各人が貧しい六家族の面倒を見るようにいわれた。すなわち、子供たちを教育し、親の職業を捜してあげ、あらゆる医療援助を行うという

責任を負ったのである。

「人民の友」はまた、現実のなまなましい諸問題を論じたパンフレットや簡易新聞を印刷した。この広宣活動は、見事に功を奏した。というのは、それは抽象的な理論は振りかざさず、主に貧しい人々の苦悩や、それに対する当局の無関心を徹底的に糾弾したからである。しかもそれは、誰人も否定できない事実を提示し、どのような結論を引き出すかは読者に預けるという形をとった。「人民の友」は、その活動範囲をパリだけに限定していた。また、会員はすべて中産階級であった。だが、三千六百世帯の労働者の家族と密接な関係を保っていた。しかも、労働者の間での評判は、その結社が労働者たちに実際に施してあげた援助をはるかに上回るものであった。当局は、この結社に敵しい一撃を加えようと機会を窺ったのである。

その結果、四つの主要な政治裁判に「人民の友」の指導者がかけられることになった。彼らに対する証拠は、根拠が極めて薄弱で、陪審員は有罪にできなかった。だが、結社自体は危険であり、看過することはできないとされた。最終公判で、その指導者たちは無罪になったが、結社そのものは、高等法院院長から解散命令を受けた。院長がこのような命令を下すことができたのは、近年の暴動が、「人民の友」が関係していることを裏付けることは不可能であったが、その運動が中産階級を脅かし、世論を共和派から離反させていたからである。

#### (4) 「人権協会」

「人権協会」は、一八三二年に結成されたが、それが重要性を帯びるようになったのは、一八三三年、すなわち「人民の友」が弾圧されてからであった。その活動はパリだけに限らなかったので、穩健な二つの有力な共和派の結社にとっては競争相手になった。「人権協会」は、そこに集まった人数だけを見ると、それほど恐るべき競争相手ではなかった。ルイ・フィリップの時代、フランスには、イギリスのチャーチスト運動に匹敵するほどの規模の結社は

存在しなかった。しかし「人権協会」は、小規模とはいえ危険なものであった。フランスの新興支配階級とその取り巻き階級は、イギリスほど数は多くなかった。それはまた、人々の中の小さな少数集団でしかなかった。彼らは、イギリスの支配階級が享受していたような多くの利点をもっていなかったのである。彼らは政治のやり方も素人であり、人々に額付かれることに慣れていなかった。また、人民のもつ伝統的な忠誠心もあてにできなかった。結局彼らは、この五〇年間、何回も暴力活動を行ってきた不安定な少数派を統制しなければならなかった。こうした事情でフランス政府は、イギリス政府が数のうえでははるかに多いチャーチスト派を恐れた以上に、数の少ない共和派を警戒するようになったのである。

「人民の友」を弾圧するために、当局は、「二〇人以上が許可なく結社をつくることを禁じた」刑法第二九一条を利用した。そのため、「人権協会」は、自分たちの組織を二〇人から二〇人までの小会派に編成し直した。組織をこのような形に組み変えたことによって、各会派は必然的にかんりの自主権をもつようになった。だがその結果、協会内部の意見の相違が表面化することになった。大部分の会派と中央委員会はジャコバン派が指導したが、残りの会派は革命派が指導権を握った。

「人民の友」は、基本的にブルジョアジーの結社であり、労働者たちには援助と保護を与えるという形をとっていた。それに対して、「人権協会」は、多くの労働者階級を含む会派から構成されていた。ブルジョアジーも労働者も参加するというこのような組織形態は、フランスの政治結社の中では、秘密結社とか暴力団組織を除くと、初めてのものではあった。「人権協会」は、公に活動し、恒久的な組織をフランス中に張り巡らせようと計画した。だが、その組織は、実際はいくつかの大きな町を除いては、決して強力なものではなかった。

しかし「人権協会」は、フランスにおける共和主義的、および急進的信条に対してひとつの大きな貢献をした。すなわち、それは、リヨンの絹織物工場の労働者たちを味方に引き入れたのである。その労働者たちは、一九世紀の残

された期間、フランスにおけるすべての反動的、保守的な政府と戦う際、最も信頼できる強力な味方となったのである。

### (5) リヨンの暴動

「人権協会」を解散させるため、政府は一八三四年初頭、結社に関する法律を制定した。その法律は、たとえ二〇名未満の小会派のような組織であっても、政府はすべての政治結社を解散できると定めていた。結局この法律は、一九世紀フランスの、労働者階級による三大反抗運動のうちのひとつを誘発することになった。すなわち、一八三四年四月のリヨン絹織物工場の労働者の暴動を招いたのである。

二ヵ月前から絹織物工場では、労働者のストライキが続いていた。そうしたなかで、ストライキの指導者たちが法廷にたたなければならなくなった時、突然、結社禁止法の知らせがリヨンに届いた。すでに怒りが頂点に達していた労働者たちは、その新法を自分たちに対する挑戦と受けとめた。「人権協会」も、政府も、もはや衝突は避けられなさと察した。前者は、リヨン委員会に警戒するよう注意を促し、後者は、一万の軍隊をリヨンに移動させた。四月九日、ストライキの首謀者たちに対する裁判が始まる直前、裁判所の外のサン・ジャン広場で一発の銃声が響いた。広場にいた労働者の群集のうち一人がぼったり倒れた。労働者たちはすぐに撤退したが、しかし、町の中の自分たちの持場に戻ると、ただちにバリケードづくりに着手した。最初のバリケードは簡単に撤去されたが、もしその時、軍隊が労働者の攻撃を潰滅していたならば、反乱はおそらくすぐに鎮圧されていたであろう。しかし、じつに不可解なことに、軍隊は一旦、町の外に撤退するよう命令されたのである。そして、軍隊が再び市街戦に転じた時はすでに手遅れであった。結局戦闘は四日間続き、暴動は鎮圧されたとはいえ、何百という犠牲者が出てしまった。リヨンの労働者に呼応して、パリでもそれに同情する反抗運動が起こった。が、すぐに弾圧されてしまった。同じくフランスの他

の町でも小さな騒擾がみられたが、いずれも拡大はしなかった。

#### (6) 共和派の運動の衰退

「人権協会」は、労働者に立ち上がるよう働きかけはしなかった。それは、敗北が目に見えていたからである。だが、ひとたび労働者たちが武器をとった時は、「協会」は彼らを支援した。「協会」は反抗を指示しなかったが、労働者たちの主張は擁護し、政府当局を激しく非難した。「人権協会」は労働者たちが行ったことに対して、「道義的な責任」(何人かの人々がそう呼ぶのを好んでいる)をあえて分担したのである。

労働者の反抗や騒擾の中で、約二〇〇〇人が共犯の罪で逮捕された。そのうち一六四人が最終的に、一八三五年五月、貴族院での裁判にかけられた。当時、「奇妙な訴訟」といわれたこの裁判は、「人権協会」を破滅させるとともに、共和派の運動にも大きな痛手を与えた。また、共和派内部の対立や相克を白日のもとにさらすことになり、同派は分裂した。その裁判は、理論的には違法であった。(というのは、被告人は、貴族院には決して連行されるべきではなかったからである)。また、裁判は正当にというよりも、報復的な意味を込めて行われた。こうしたことから、この裁判は結果的には、政府の信用の失墜を招くことになったのである。

このような事件が続いたため、フランス人の大多数は、自分たちの支配者と共和派には辟易した。もし彼らが何をなすべきかということを知っていたならば、彼らは、政府も共和派も追放してしまっていたであろう。

ところが多数派の宿命は、つねに動きがないというところにある。言い換えれば、少数派間の争いは、その結果がどうであれ、何かが生き残るものである。結局目下のところ、政府が共和派を追放した。いなもう少し正確にいうと、政府は共和派を地下に追いやってしまったのである。

## 第四節 沈黙の数年間

一八三〇年末から一八四〇年代初頭にかけての革命運動

## (1) 沈滞する共和派の運動

一八三〇年代末から一八四〇年代初期にかけての共和派の運動は、まるで死に絶えてしまったのではないかと、当時の人々の目には映った。多くの共和派の指導者たちは、獄中にいたか亡命していた。また、本当の犯罪者や、労働者と実際に接触する人々は、すべて過激派か、社会改革者か、あるいは革命家であったとはいえ、穩健派もまた全般的には不名誉な汚名を着せられていたからである。穩健派の一番重要な機関紙『ナショナル』は生き残ったが、その有能な編集者アルマン・カレルは決闘で死んでしまった。共和派は生気を失い政治的関心もなくなっていた。一八三七年と一八四七年の恩赦によって指導者たちが復帰しても、共和派の人々が勇気をもって再起するにはかなりの時間がかかった。復帰した亡命者たちは、昔に比べて穩健な思想のもち主となり、法を尊重した。すなわち、そのような徳をもった人々は、抑圧的な政府のもとで行動力を喪失したのである。

## (2) 秘密結社

だが、そのような共和派の中にも、何人かの活動的な人はいた。なかでもとくに大胆な人々、すなわち、過激で革命的な連中は、秘密結社を組織した。その結社については、残念ながら詳しいことはよくわからない。穩健共和派は彼らの存在を憤慨した。それは、共和派の考え方に善ではなく、悪の印象を与えるからである。過激派は、たしかに当局にとっては有益であった。警察のスパイをその中に送りこむことによって、警察本部にとって最も都合の良い時間と場所で反乱を起こさせることが可能だったからである。そのような警察のスパイの一人、ドラオッドは、後に



『秘密結社の歴史』という本を著した。それは必ずしもすべて真実を書いているわけではないが、当時の秘密結社の活動を知るにはよい手掛りを与えてくれる。ドラオッドは、革命的な結社に関心をもっており、そのために、どうしてもその結社の重要性を誇張する傾向にあった。そのような秘密結社は、少数の指導者を別にすると、殆どすべて労働者から構成されていた。そうした結社の中で、一番過激だったものは、警察のスパイが最も多く侵入したものであったように思える。そして、ブランキヤバルベを初め、指導者たちが直面した最も困難な課題は、ドラオッドのようなスパイが、次から次へと引き起こす暴動をどのようにおさえるかということであった。一八三七年五月、パリでの労働者の暴動によって、ブランキヤバルベは逮捕され、彼らは一八四八年まで投獄されることになった。いわば、その暴動は完全に失敗に終わったわけだが、その原因は、警察の誘発、挑発にあったと考えられる。ブランキが投獄されると、革命的結社の動きはほぼ停止し、警察によって糸を握られている操り人形のようになってしまったのである。

なお革命的ではない秘密結社もあった。それらは大部分が親睦的か教育的なものであった。だが中には、労働者に共産主義を教えようとするものもあった。カベは、そうした影響力を少しでも和らげるために、彼独特の、警戒心をもった、より平和的な共産主義を説くことにした。カベがそうしたしたのは、当時の秘密結社の多くは、実際は革命的ではないにもかかわらず、そのパンフレットの中では、暴力に関する用語を使用し、注目されていたからである。カベと同様、それら結社は暴力を公然と非難しなかった。それらは当面、暴力を差し控えたにすぎなかったのである。

#### 第五節 革命への序曲

#### 一八四一年から一八四八年にかけての革命運動

ルイ・フィリップの治世の最後の六、七年間——私が便宜上区分した第三期目——は、驚くほど平穩であった。

七月王制を倒した最後の暴動を除くと、その期間には目立った反抗運動というようなものはなかった。ここに、復古王政と七月王政との間に、ある類似性が見られる。それは、第一に、両体制ともその後期よりも初期において暴力に悩まされたこと。第二に、両体制を倒した反抗は、長い社会的な静謐のあとに偶然起こったものであるということである。それにしても両体制の崩壊は、まことに呆気無いものであった。

### (1) 無政府状態の忌避

説得力のある説明というものは、えてして簡潔なことが多い。初期の頃、あまりにも暴力が頻繁に繰り返されたため、おそらく他の方法では無理であったかもしれない味方を、政府は手に入れることができた。すなわち、多くの人々は支配者に何も期待しなかったが、ただひとつ、法律と安定した秩序を強く望むようになったのである。

一九世紀のフランスの革命運動にとって、最大の障害物は、民衆が体制に対して忠実であったということではなく、むしろ無政府状態を恐れたというところにあった。人々の恐怖心があまりにも強いと、革命家たちの行動や宣伝は、ある階級の中では成功するとしても、それを永続化させることはできない。革命家たちの関心は、おそらく味方の数を増やすことよりも、敵の数を減らすことにあつたのであろう。もしこの指摘が正しいとすると、——私はそう信じてやまないのだが——、これは、フランスの革命運動の幸運と不運とを的確に説明しているといえる。というのは、革命家たちは、つねに自分たちの力を過大評価し、自分たちが成功したのは、敵が弱かったり、人民が無関心であったりしたからではなく、自分たちの力が強かったからであると確信した。だが、革命運動が一応成功したといえるのは、革命家たちが、極端な要求を断念したり、同盟者を尊敬して受け入れたり、そして、はやる気持を抑制したりした時であった。後の章でふれるが、不幸にも革命家たちは、どのような条件ならば、自分たちが多くの味方をえることができるのか、全く見当をつけられなかった。そのために、フランスが折角彼らに良い条件を提供しようとし

でも、いつも自分たちの方からそれを放棄してしまったのである。

それはともあれ、一八四〇年代に共和派は、それに先立つ三〇年代の時よりも、慎重に行動するようになった。そのため共和派は、かなり勢力を回復することができた。一八三六年、共和派は議会で一議席しかもっていなかったが、一八四二年には、六議席になった。議場での共和派は、たしかに一握りほどの存在でしかなかったが、しかし、その存在感には重みがあった。

## (2) 共和派の鎖の輪

三〇年代初頭、議会で政権の争奪戦を演じた大きな党派は、そのどれもが政権を掌握できる好機をもっていた。だが、一八四〇年代までに政権を占有したのは、ギゾーの率いる最も保守的な党派であった。議会でギゾーを支えていた党派は、限定された有権者の中での多数派であった。それは、決して広く一般民衆から支持されたものではない。ギゾーの党派が議席を維持できたのは、有権者の支持をかちえるために、かなりの金銭と影響力を行使したからである。反ギゾー派は、これでは永久に政権奪取はできないと危惧した。もし反ギゾー派が、再度、政権奪取を狙うというのであれば、彼らは議会外に、また、臆病で買収されやすい有権者以外に、味方をえなければならなかった。

反ギゾー派は、その味方を議会内の共和派の尽力によって見い出すことができた。議会の共和派としても、危険を冒してまでもギゾーを政権の座から追放したいと望んでいる友をえることができたのである。しかもその友人たちは、自分たち以上に危険を冒すことを厭わない友人をもっていた。かくして、議会内の身分の高い共和派から、彼らが全く知らない、また、ふだんであれば直接触れあうことすらない党派にいたるまで、ひとつの、いわば友情の鎖が生まれたのである。

この友情の鎖によって、隣り合った輪同士が互いに他を引き寄せあった。鎖は途中で、何ヶ所か切断されてしまう

かもしれない——實際すでにたち切られた。だが、それが再び結び合わさった時、革命が成功することは間違いない。しかし、個人的にも集団的にも、その友情の鎖を全体として構想していた人はだれもいなかった。また、切れた箇所を慎重に結びつけようとするものもいなかった。じつに、条件が熟したがゆえに、鎖が自然につながったとしかいいようがなかった。この条件が熟した時というのは、具体的には、人々が無政府状態を恐れた時というよりも、その支配者に飽きを感じた時であった。じつにフランスは、一八三〇年以前と一八四八年以前の数年間、まさに人々はその支配者に対して飽きを感じていたのである。

### (3) 二つの共和派

一八四〇年代に、二つの重要な共和派の新聞が発刊された。ひとつは、穩健派の機關紙『ナショナル』紙、もうひとつは、急進派の『レフォルム』紙である。王党左派、すなわち、ギゾーに対する議會内野党と協調したのは穩健派であった。

#### ① 『ナショナル』紙

『ナショナル』紙は、理念としては、共和政と男子普通選挙制を掲げたが、實際は、それほど過激な要求はしなかった。同紙の要求は、時として王党左派や、中産階級に選挙権が与えられるようにということであり、そうなれば、ギゾー政権は崩壊するであろうと確信していた。ギゾーの一貫した変わることはないイギリス追従外交は、選挙権はないが、国民兵の中枢をなしていた下層階級の人々を怒らせた。共和派は、それまで国民兵は自分たちの敵だと思っていたし、一方、国民兵の将校や兵士たちも、共和派こそつねに平和を脅かす存在であると信じていた。国民兵の中の普通の市民たちは、"下層階級連中"から自分たちの身を守ろうとしたが、だからといって、ルイ・フィリップやその政府のだれかに阿って助けてもらおうとは思っていなかった。それどころか、今や、穩健共和派がこれまで以上に

穩健になり、また、フランスで愛国的になったこと、さらに同派が小店主、下層労働者、職人に選挙権をもたせないことを非難したこと、そしてここ数年、労働者の暴動がなかったこと、などの理由により、国民兵の人々ですら反政府的になっていたのである。もし国民兵の人々が、政府に反抗の火の手を上げなかったならば、一八四八年の革命は決して成功しなかったであろう。なお、彼らが立ち上ったのは、穩健共和派とその機関紙『ナショナル』紙の政策によるところが大きい、このことは看過できない。

## ② 『レフォルム』紙との関係

ジャコバン派とその機関紙『レフォルム』紙は、穩健派の新しい方針を嫌い、それに不信感を懐いた。ジャコバン派は、穩健派を共和主義の信条に対する裏切り者と詰った。ジャコバン派は、一八三〇年代初期に、あわや自派と穩健派とを分断させるところまで行った妬みと相剋を忘れなかった。とはいえジャコバン派は、穩健派と協力して達成すべき多くの目的をもっていたので、あえて大同団結した。共和派内の二つの主要な党派の環は、しばらくは切れなかった。革命が終了するまでの間は、結び付いていたのである。その絆は、襲いかかるすべての重圧に耐えるだけの強さをもっていた。

急進派、あるいは当時、『レフォルム』紙の共和派ともよばれていた派は、それ自身は決して革命的ではなかった。だが、彼らは革命派と提携していた。革命派と穩健派は友人であり、少なくとも敵ではなかった。また両者は、体制に対して法律の枠内で反対するか、それとも法律を破って反対するか、という運動論に相違はあったが、それでも目指す方向は同じであった。私は、ギゾー体制に反対する政治的諸党派間の関係を説明するのに、“友情の鎖”という表現を用いたが、実際のところは、彼らは同盟関係でも、友人同士の集団でもなかった。彼らの考え方や感情は違っており、協力して行動するという関係ではなかった。ここでいう友情とは、一人一人が、誰かと結び付いているという関係のことを指す。鎖という比喻は、このような意味なのである。

しばらくの間、といってもギゾー政権を打倒するまでの間、反ギゾー派は協力しながら歩みを進めた。彼らは、同じ方向に向って進んでいるということに気がつかなかったが、いつの間にかそうなっていた。というのは、それまで彼らを離反させていた多様な利害や感情が、今度はたまたま彼らを団結させることになったからである。鎖の中で最強というわけではなかったが、大きな役割を果たしたのは、急進派と穏健派を結び付けた輪であった。両派が団結すると、すべての反政府派は、たがいに対立していた時以上の力を発揮して、反政府活動に邁進できるようになったのである。

#### (4) 協力関係の推進

政治においては、就中、大きな組織化された党派がない国家においては、自分がどれ位強いのか、または、弱いのか、見当がつかない場合が多い。もちろんその場合でも、自分の力と友人の力がある程度推測することはできる。しかし、もし自分がなんらかの行動を起こした時、果たして他の党派がどのような反応を示すかを正確に予測することは難しい。一八三〇年代の初期、共和派は大胆かつ行動的で、人数も増えていた。とはいっても、政府には再三、痛い目にあわされていた。四〇年代になると共和派は、思慮深くなり、理想だけで行動するということはなくなった。状況が自分たちに有利かどうか、時間をかけて検討するようになったのである。だがそのために、今度は逆に、時には状況がすばやく変化したことに気がつかず、気がついた時には革命がすでに終わっていたというようなこともあった。また共和派は、その変化が急激であると同時に、深いものであるということを見過してしまうこともあった。

一八四六年、穏健共和派は、パリで王党左派と選挙同盟を締結する関係にまでなった。穏健派は、この同盟を結ぶにあたって王制の承認に同意した。ジャコバン派は、その同盟を非難したが、その非難は、さしあたり殆ど意味をもたなかった。ジャコバン派は、自分たちは王党左派とは何の関係ももたないであろう。だが、自分たちが友好関係を

断った人であろうと、その人の敵は、やはり自分たちにとっても敵である、といった。

これまでに、急進派が介入できる機会が種々あったが、それよりも王党左派の反政府的な闘争の方が、明らかに効果的であった。急進派は、王党左派との協力を拒否できないことはない。しかし、急進派のそのような行動は、もし彼らは何かしたいと思っても、自分たちの利益にはならず、王党野党の利益になってしまふことは確かであった。急進派は、もし合法的な野党が完全に敗北すると、共和的で社会的な改革がこれまで以上に中断してしまふであろうということを知っていたので、今までとは違った、より希望にあふれた闘争を真剣に遂行しなければならなかった。

## (5) 革命への動き

### ① 大飢饉

さてこうした中で、フランスは他国よりかなり遅れて、一八四〇年代の中頃、ヨーロッパのほぼ全地域を襲った大飢饉に見舞われることになった。当時の政治家は、その多くが、飢饉による苦痛を治すための手立てを仲々とれないでいたが、ギゾーもまた同じであった。ギゾーの政敵は、彼の手に負えなくなったこの困難な状況をうまく利用した。彼らは、イギリスの反穀物法運動が成功を収めたことに深い感銘を受けた。フランスにおいて、世論を動かすために、同じような運動を行うことは、イギリス以上に危険かもしれない。しかし、彼らはそれを行う価値はあると確信した。もし政府が、そのような運動は革命にまで発展する恐れがあると考えれば、彼らは、一早く時宜をえた譲歩を行い、そのような運動を差し引かえることもやぶさかではなかったであろう。しばらくの間、王党左派とその穏健共和派との同盟は、自分たちの運動は合法的なものであり、秩序正しい性格のものであると、強調していたのである。

## ② 改革宴会

王党左派や穩健共和派の運動は大成功であった。その運動は、パリや地方で開催される一連の政治宴会という形をとって行われた。最初の宴会は、一八四七年七月九日に開かれた。「各宴会が成功したため、政府は差し迫った宴会の禁止を決定した。この決定こそが革命を誘発したのである」ということがしばしば指摘される。だが、この見方は誤っている。革命が一気に盛り上がったのは、ある宴会が禁止されたからであった。だが問題の宴会は、運動を組織していた人々が開催したものではなかった。これは、些細なことかもしれないが、現実問題としては極めて重要なことである。

野党によって組織された運動は、一二月に断念された。というのは、それはある意味では大成功し、他の意味ではそれほど成功したとはいえないからである。野党は、民衆を駆り立て、反政府運動を盛り上げるのは簡単であると思っていた。だが野党は、政府を脅迫して譲歩を引き出すということはしなかった。もしギゾーが、自分の頑固さのためにフランスが危機に陥っているということに気がつかず、そうこうしているうちに民衆が興奮して暴走するようなことになれば、どうなるのであろうか。野党は、自分たちが成功してしまうことを恐れた。彼らは、いくら勝利したとしても、そのために、自分たちでは押えがきかなくなる力が暴走することは好まなかったのである。

パリで、さらに別の宴会が開催されることになった。それは、野党の指導者が企画したものではなく、国民兵の一二区部隊の将校たちが企てたものであった。当時、パリは一二区に分かれており、同部隊は第一二番目の、最も貧しい地区出身の兵士たちから構成されていた。宴会を開催する委員が、一月一六日に選出された。委員会の書記担当者には法律に従って、当局に開催許可の申請をした。その申請は却下された。しかし、改革宴会を開催する委員会としては、その申請は委員会にはかられずに、書記担当者が行ったものであるという理由で、当局の却下を無視することにした。また、宴会は、もし野党の代議員がそれに招待されなければ、政府を無理にでも世論に従わせるという宴会



の目的が達せられたとはいえない、ということに決めた。野党の代議員たちが最初に行ったことは、その委員会を説得して、その宴会を二月一三日以降まで延期させることであつた。野党の代議員たちは、その日に議会で、政府に「申請した許可がなぜ却下されたのか」という理由を問い糺すつもりであつた。

二月一四日、政府が質問に対して満足のいく回答をしなかつたため、野党の代議員たちは、計画に係するすべての人々を説得し、全野党の代表から構成される新改革宴会委員会の選挙を行うことにした。またその際、代議員たちは、関係者に対して次の点についても同意を求めた。

- (一) 改革宴会への参加券の値段は三倍とする
  - (二) パリの第一二区外で開催する
  - (三) 議会選挙の有権者のみに入場を許可する
  - (四) 急進共和派の指導者ルドリユー・ローランは招待しない
- こうした要求がすべてかなえられたわけではなかつた。すなわち、入場券の金額は二倍とされ、ルドリユー・ローランは招待された。しかし、代議員たちは宴会の性格を変えることには成功した。すなわち、改革宴会は、もし先の手を打っておかなかつたならば、そうはならなかつたであろうような、じつに秩序正しいものになつたのである。

### ③ 革命前夜

二月二一日の午後、政府が宴会を厳禁した時、ルドリユー・ローランやルイ・ブランを含む宴会に係していたすべての政治指導者たちは、政府の命令に従うことにした。このように政治家たちが間に入ったことによって、改革宴会の性格は全体として変化することになった。まず何よりも、提案されていた宴会が、政治家の「基盤をもっと広げよう」という口実によって、中味が変わった。また、政府の態度がどうも本気らしいということが明らかになるや、政治家たちは開催を放棄してしまつたのである。これが革命の前日、二月二一日夕刻の様子であつた。自由の身であつ

た政治指導者たちをはじめ、最も過激な共和派のメンバーでさえも、暴力を行使するつもりは全くなかった。プランキヤバルベのような本当の革命家たちは、まだ獄中にいた。ギゾーは、自分の知っている政敵たちがあまりにも早く戦闘を放棄してしまったのをみて、もう大丈夫であると安心したのかも知れない。もしギゾーに、政敵は決して油断できないものであるとの警戒心があったならば、彼は敵に対して断固たる態度をとり、敵を徹底的に従わせようとしたであろう。しかもそのうえ、共和派について冷静に分析してみると、共和派が恐れていたのは革命であり、彼らがフランス全土で思いのまま侮辱していたある特定の人——ギゾー——ではなかったのである。

※本稿は、JOHN PLAMENATZ, *The Revolutionary movement in France 1815-71* (LONDON・NEW YORK・TORONTO, 1952)の翻訳である。章・節以外の小見出しは訳者がつけた。

(一)は、「序論・第一章 大革命」、(二)は、「第二章 復古王政」。次回(四)は、「第四章 第二共和政」である。